

平成30年7月13日

久留米市議会議長 佐藤 晶二 様

経済常任委員長 原口 和人

委員派遣実施報告書

本委員会は、次のとおり委員派遣を実施しましたので、報告書を提出します。

記

- 1 日 程 平成30年7月3日（火）～5日（木）
- 2 派遣先 青森県八戸市：第2期八戸市中心市街地活性化基本計画について
及び内容 岩手県盛岡市：食と農のバリューアップ推進戦略について
- 3 派遣委員 委員長 原口 和人
副委員長 早田 耕一郎
委 員 山村 太二 市川 廣一 塚 陽一郎
古賀 敏久 別府 好幸 田中 多門
田中 功一
- 4 報告書 視察報告書のとおり
- 5 その他 随行 澁田 佑美

視察報告書

委員会名	経済常任委員会
視察日時	平成 30 年 7 月 4 日 (水) 午前 9 時 30 分 ~ 午前 11 時 30 分
視察先・概要	青森県八戸市 人口：約 23 万 3 千人 面積：305.54 k m ² 特記事項：中核市
視察内容	第 2 期八戸市中心市街地活性化基本計画について
選定理由	計画期間が平成 30 年 3 月までであった本計画をもとに実施された具体的施策とその効果などの状況について、本市における中心市街地活性化の取り組みの参考とするため
調査概要	<p>八戸市議会事務局庶務課の北村課長の挨拶に引き続き、まちづくり文化スポーツ部まちづくり文化推進室の石鉢中心市街地活性化グループリーダーより、第 2 期八戸市中心市街地活性化基本計画についての説明を聴取し、質疑応答を行った。</p>  <p style="text-align: center;">＜視察の様子：八戸市＞</p>
調査内容	<p>本計画は、「多彩な人々が集い、多様な機能が集積する「八戸の顔」にふさわしい個性あふれるまちづくり」をテーマとし、来街者増、定住促進、空き床の解消の 3 点を目標に掲げている。</p> <p>官民一体となって各種事業に取り組んだ結果、来街者増、定住促進については平成 29 年度の目標値未達成であるが、空き床の解消については目標値を大きく上回って達成という結果が出ている。空き床の解消に向けた事業としては、例えば、IT・テレマーケティング関連産業立地促進事業では 13 社中 12 社が中心街付近に立地し、雇用人数は約 1,200 人で平均年齢 34 歳という実績が出ている。</p>

ほかにも、中心商店街での「はちのへホコテン」の継続的な実施や、横丁関連イベントも一体的に実施することによりにぎわいの創出も図られた。また、「はっち」内の創業支援スペース等を利用した若手経営者による専門店が相次いでオープンするなど、新たな消費者を惹きつけている。

【八戸ポータルミュージアムはっち】

平成 23 年に開館。にぎわいの創出や観光と地域文化の振興を図ることで、中心市街地と八戸市全体の活性化を目指す。事業コンセプトは「地域の資源を大事に想いながら新しい魅力を作りだすところ」。展示作品等は市民作家や市民学芸員により制作されており、八戸の資源とともに八戸の誇りとして伝える。建物の各所で、観覧や活動、買い物や飲食等を楽しめる造りになっている。



【八戸ブックセンター】

平成 28 年 7 月に民間事業者が整備した「六日町地区複合ビル（ガーデンテラス）」に、同年 12 月に「本のまち八戸交流拠点形成事業」による市直営の書店「八戸ブックセンター」を開業。

「本のまち八戸」を目指す各種事業に続く、大人を主な対象とした施設。中心市街地活性化に寄与するとともに、本を通じた市民交流及びまちづくりの拠点施設としても位置づける。施設内には、本棚に囲まれた席やハンモック席などのユニークな読書席、読書会ルームなどのスペースも提供している。



主な質問・
応答

問：「はっち」は、市直営で行う中、イベント等の企画立案はどのような形で行っているのか。民間の方の協力等はあるのか。

答：市の職員のほか、企画等に長けた嘱託職員を採用し、自主事業の企画をしている。また、民間のアドバイザー・専門家の方を年に数回呼んで御意見を伺うなどして運営に努めている。

問：「はっち」の当初の集客予想に対し、実際どうだったのか。

答：年間 65 万人の想定に対し、ここ数年は 95 万人前後の来館。

問：コールセンターが非常に多く入り、約 1,200 人の雇用を生んでいるとのことだが、若い女性が多いのであれば、子どもを預ける保育園などはどのような状況なのか。

答：中心市街地のビルの中にも保育施設がある。ただ、中心部で働く方は居住地の近くに保育園があり、そこではマッチングできており、待機児童の問題は八戸市では特にないと聞いている。

問：高齢者向け施設や医療関係の支援について、計画はあるのか。

答：医療に関しては中心市街地に個人の専門の医院等があるが、大きな医療施設については別の地区に集積している状況。高齢者施設は市全域にあり、中心市街地には置いていない。

問：中心商店街活性化は店舗等の大家との関わりが重要と考えるが、何か

	<p>対応しているか。</p> <p>答：民間の方々に前向きに動いてもらうための呼び水となるよう、市としてはまず都市機能の整備などを行っており、月1回の会合も開いている。</p>
その他（意見・感想）	<p>本市は、久留米シティプラザの集客を中心商店街の活性化につなげることが課題であるが、八戸市でも「はっち」などのにぎわい創出のための公共施設を生かすさまざまな取り組みを続けている。また、IT・テレマーケティング関連会社が多く中心市街地に集まってきており、特に若者をターゲットとした取り組みが来街者増へつながるのではないかという印象を受けた。</p> <p>本市でも、シティプラザのさまざまな活用も含め、中心市街地活性化に向け、官民一体の取り組みを進めていく必要がある。</p>

視察報告書

委員会名	経済常任委員会
視察日時	平成30年7月4日（水） 午後2時30分 ～ 午後4時00分
視察先・概要	岩手県盛岡市 人口：約29万2千人 面積：886.47 k m ² 特記事項：県庁所在地、中核市
視察内容	食と農のバリューアップ推進戦略について
選定理由	食と農の連携推進室を立ち上げ、プロジェクト化して取り組んでいる盛岡市の食と農のバリューアップ推進戦略における取り組みや課題について、本市の6次産業化などの施策の参考とするため
調査概要	<p>盛岡市議会事務局の中村事務局長の挨拶に引き続き、農林部農政課の吉田課長及び農政課主幹兼食と農の連携推進室の佐々木室長より、食と農のバリューアップ推進戦略についての説明を聴取し、質疑応答を行った。</p>  <p style="text-align: center;">＜視察の様子：盛岡市＞</p>
調査内容	<p>盛岡市は、一昨年の国体開催、東京2020オリンピックのカナダのホストタウン決定などを契機に、食と農の連携について、初めてプロジェクト化して取り組み始めた。</p> <p>平成29年度から31年度までを集中取組期間とし、農業と加工・製造業、飲食・宿泊業など、食に携わる全ての事業者との連携を強化し、「盛岡ならではの」食材の魅力への理解を主眼に、高付加価値化により販路拡大を目指すことで、農家所得の向上や食産業の活性化に貢献することを目的としている。</p>

	<p>初年度は、現状認識として強みと弱みを細かく分析し、具体的な事業への展開につなげている。盛岡ならではの食材としては、アロニア、もりおか短角牛（通称：赤べこ）、行者にんにく、盛岡りんごなどに注目している。平成 30 年度の主な取り組みは、生産者と事業者、消費者をつなぐ盛岡産農畜産物ファン交流サイトの開設、盛岡産農畜産物の生産現場を体験できる機会の創出などとなっている。また、盛岡産農畜産物の市内外への魅力発信の実績として、岩手日報タブロイド版（全 8 ページ）の全戸配布による市内への認知度向上の取り組み、有名シェフによる食材魅力紹介セミナーの東京での実施、東京・沖縄・仙台などでのトップセールスの実施などが挙げられる。</p>
<p>主な質問・ 応答</p>	<p>問：食と農の異業種間の取り組みということだが、具体的にはどのようなことを実施しているのか。また、ポータルサイトを立ち上げて情報収集をするとのことだが、SNS等の活用状況は。</p> <p>答：今回の戦略プランを約 20 名の異業種で集まって作りあげたところで、これから各種事業へ動き出すところである。ポータルサイトは現在準備中で、盛岡のイメージについてなどのアンケートを実施したところである。</p> <p>問：担い手不足の実態はどうなっているのか。</p> <p>答：もともと、本戦略は農家の後継者不足などの課題がある中、農家所得の向上を目指すところからスタートした。農業にだけ視点を置いても限界があるため、食と農の戦略としたものである。</p> <p>問：もりおか短角牛は生産数が少ないようだが、採算はとれるのか。将来的に都会などに売り出すなどの展望・見込みはあるのか。</p> <p>答：短角牛は、子牛を作る畜産農家は多いが、その子牛を県外に多く売っている状態である。そこで、肥育までを盛岡でしていただきたいということで取り組んでいる事業である。</p> <p>問：GAP取得については、GAPにもさまざまな種類があるが、グローバルGAPに限定したりしているのか。</p> <p>答：岩手県の県版GAPというものがあり、その県版GAPの取得は農家の方の経費がかからないため、県版GAPの取得を目指すことで経費を抑</p>

	<p>えようと考えている。現在1件の農家が取得しているが、東京2020オリンピックもあるので、GAP自体の周知を進めなければならない。</p> <p>問：盛岡りんごのタイへの輸出は、市単独で支援をしているのか。</p> <p>答：農協が輸出していて、市はこれまで支援はしていない。輸出10年目ということで市がタイアップしようということとなった。</p>
その他（意見・感想）	<p>盛岡市と本市の農業が抱える課題や現状は、非常によく似ている。盛岡市は、プロジェクト化して全市的に力を入れているということは注目すべきことであると感じた。</p> <p>食と農にかかわる全ての人が連携・協力し、それぞれの役割を果たすことは、それぞれが自分の利益だけを求めると、実現できないことである。農畜産物の高付加価値化と、「食のまち」としての新たな価値を生み出すことに市が積極的に取り組むことで、結果として食と農にかかわる全ての人が満足を得られる仕組みをつくる必要があると感じた。</p>